

9 か月間の予備教育を受けた中国人日本語学習者の作文

——構成・結束性を中心に——

The analysis of Japanese Essays by Chinese Learners who have undergone preliminary Japanese education for 9 months: Focusing on Organization and Cohesion of Essays

坪 根 由 香 里*

TSUBONE Yukari

This study analyzes Japanese essays written by 33 Chinese learners who underwent preliminary Japanese education for nine months. The findings are as follows: (1) compared with the essays written at the beginning of the course, length per sentence increased after nine months, and the length of the compositions as a whole nearly tripled; (2) as for macro-organization, about half of the essays had problems such as no introduction and/or conclusion, and there were many essays in which the extent of text in the introduction, body, and conclusion was not balanced. For example, some essays have only one sentence in their introductory and/or concluding paragraphs. Moreover, the usage of meta-language was rare; (3) regarding conjunctive expressions, the use of adversative, additive, exemplificative, and resultative constructions were conspicuous, but misuse of "soshite" and "sorekara" was noticeable even after nine months. Since it has become obvious that the preliminary education is not sufficient to prepare the students for academic writing, additional training for organization and cohesion of essays should be incorporated in the writing education of the university.

キーワード：ライティング教育 (writing education)、言語的特徴 (linguistic features)、マクロ構成 (macro-organization)、接続表現 (conjunctive expressions)、メタ言語 (meta-language)

1. はじめに

近年、アカデミック・ライティング教育の重要性が高まり、アカデミック・ライティングにおいてどのようなものが good writing かを探る研究なども行われている (田中・坪根 2011、坪根・田中 2015)。大学入学を目指して日本語予備教育機関で学ぶ日本語学習者にとって、「書く」ことは日本留学試験の記述問題や大学入試に必要なものである。それと同時に、予備教育段階における作文教育は、大学入学後のアカデミック・ライティングにもつながる重要な段階である。大学では、日本語学習を始めて間もない段階から、大学の授業でレポートなどの文章作成を要求されるため、作文の構成、文の結束性等を早い段階から指導したほうが良いとの提案もある (西山 2016)。一方、予備教育において指導し切れない部分に関しては、大学でも把握し、対応する必要がある。

多くの日本語予備教育機関では、教科書を用いた文型

や語彙、漢字等の学習が中心に行われ、作文教育ではその限られた文型や語彙を用いて、短いものから徐々に長いものへと移行していく。予備教育機関の学習者が目指す日本留学試験等のように、一定の長さの作文の場合、日本語の正確さや内容に加え、全体の構成も評価の重要な要素となる。また、読み手が作文をストレスなく読み進められるかどうかは、構成だけでなく、段落間や文と文の間のつながり、つまり、結束性も大きく影響する。

では、予備教育を受け、大学入学を目指す日本語学習者の書く作文は、構成・結束性においてどのような特徴があるのだろうか。アカデミック・ライティングが書けるレベルになっているのか。あるいは、不足している点があるのだろうか。本稿では、9 か月間の予備教育課程を受けた中国人日本語学習者が書いた作文を分析し、その「構成」と「結束性」に見られる特徴を明らかにする。また、あわせて、総文字数、総文数、使用語彙のレベル等の言語的特徴の変化についても報告したい。

*大阪観光大学観光学部/日本語教育

2. 先行研究と本研究の課題

(1) 先行研究

1) 言語的特徴に関するもの

日本語学習者の書く作文の言語的特徴について調査したのものには波多野 (2018) がある。波多野 (2018) は、JF スタンダード¹⁾ B1 レベルの作文課題の解答データを用い、達成群、中位群、不達成群に分けて、文字数、形態素数、文数、漢字率などの記述量や語彙の多様性を分析している。その結果、記述量は全ての指標で達成群が不達成群より数値が高いこと、1 文当たりの文字数と形態素数は、群間で大きな差は見られず、記述量の差は「文の長さ」の差でなく、「文の数」の差であること、達成群は活用が関連する文法形態素の多用が顕著であることなどを示している。

また、田中他 (2017) は、ヨーロッパの学習者によって書かれたエッセイ (作文) を「目的・内容」「構成・結束性」「日本語」の 3 つの項目に分けて分析している。その中で「日本語」については、193 編の作文を上位群、中位群、下位群に分けて言語的特徴を比較し、上位群はエッセイ全体が長く、1 文の長さも長くなっており、語彙のバリエーションが下位群に比べて多いことが明らかになったとしている。

2) 構成・結束性、メタ言語に関するもの

「構成」には、文章全体の構成を指す「マクロ構成」と、パラグラフ内の構成を指す「ミクロ構成」があり、「マクロ構成」は基本的には「序論・本論・結論」から成る (田中・阿部 2014)。本稿では「構成」を「マクロ構成」の意味で用いることとする。

坪根・田中 (2015) は、「通学授業と遠隔授業」について比較・論証した小論文を使用し、「いい内容」「いい構成」について調査したものである。その中で「いい構成」の要因として、①メタ言語の使用、②適切な段落分け、段落内の内容が完結していること、③支持する立場のデメリット、反対側のメリットを示した上で、支持する理由を述べるという展開、④支持する立場、支持しない立場に関する記述量のバランスの 4 つを挙げている。

また、前掲の田中他 (2017) は、54 編の作文の「構成

の『型』について調べ、レベルの低いものはマクロ構成意識がないが、上位レベルになるとマクロ構成も認められ、効果的な論理的展開となることを示している。

マクロ構成を考えた場合、「結束性」は重要な要素である。「結束性」とは、文と文やパラグラフ²⁾とパラグラフがスムーズにつながっているかどうかを表すもので、「接続表現」「指示表現」を使ったり、「語彙の連関」として言い換えや反復を使うことや、「メタ言語」の使用によって結束性を高めることができるとされている (田中・阿部 2014)。メタ言語とは、「本文の内容とは直接関係のない、文章の展開を理解しやすくするような機能を持つ表現や説明のこと」 (田中・阿部 2014) で、パラグラフの最初または最後によく使われる。田中・阿部 (2014) によると、形式面では、「まず」「以上のように」等、語・句レベルのものと、「次に～について説明する」「以上、3 つの観点から検討した」等、文レベルのものがある。また、機能面では、「次に～について述べる」のような「予告のメタ言語」と、「以上、～について述べた」のように、締めくくりの役割を果たす「まとめのメタ言語」がある。

メタ言語の使用に関しては、田中他 (2017) が、レベルが上がるにしたがって、パラグラフの冒頭で適切なメタ言語が使われるようになり、それが結束性と関係していることを示している。その上で、「good writing にマクロ構成と結束性は不可欠であり、メタ言語はその有効な手段の 1 つだ」としている。

なお、本稿では、段落間で使用された場合に限り、接続表現についても「文章の展開を理解しやすくするような機能を持つ」と考え、メタ言語に入れて分析する。また、「接続表現」には、接続詞だけでなく、「まず」「第一に」のような副詞が接続詞的に機能するものも含めることとし、これらもメタ言語として分析する。

3) 接続表現に関するもの

接続表現は、マクロ構成だけでなく、ミクロ構成、すなわち、文と文のつながりにも重要な役割を果たす。ここではミクロ構成も含めた接続表現の先行研究について述べる。

「接続表現」に関する研究の中で、黄 (2012) は中国の大学で日本語を専攻する中国人日本語学習者の作文に見られる序列の接続表現 (「まず」「次に」「最後に」、「第

一に」「第二に」「第三に」など)の問題点について調べたものである。調査の結果、説明文、意見文の最大の問題点は、文章の全体構成がわかりにくい点にあるとしている。特に説明文では、「それから」「そして」などが連続して使用されること、段落冒頭でなく途中で序列の接続表現が出現する場合に序列の接続表現を多用することでわかりにくくなっていることが述べられている。また、中国人学習者の場合、説明文、意見文共に「まず」系列を使用する傾向が見られたという。

倉持・鈴木(2007)は中級レベルの学習者を対象に接続詞使用のアンケート調査とフォローアップインタビューを実施し、「そして」「それから」「すると」に誤用が多いとしている。

範(2011)は、中国語母語話者の中国語作文を分析し、日本語作文に与える中国語の干渉について調査している。その結果、中国人日本語学習者の中国語作文における「連詞」(文と文をつなぐ接続表現) > 中国人日本語学習者の日本語作文における「連詞」 > 日本語母語話者の日本語作文という順で接続表現を多く使うことを示している³⁾。範(2011)によると、中国語作文における「連詞」には、日本語では複文における接続助詞になる「条件」「目的」「仮設」等も含まれるため、中国語作文における「連詞」の使用数が多いのは当然と言えるが、それが日本語作文における「連詞」の多用にもつながっているという。また、中国人による中国語作文では、「因果(日本語の「順接」、日本語訳「だから」「ですから」「そうすると」等)」、「並行(日本語の「添加」「対比」「同列」が含まれる、日本語訳「と同時に」「そして」等)」、「転折(日本語の「逆接」、日本語訳「しかし」「それなのに」「けれども」等)」の3種が相当多く使われているという。これらは、中国人母語話者が日本語作文を書く際にも多く使われ、それは中国語からの干渉によるものとしている。

(2) 本研究の課題

以上の先行研究では、「いい構成」のためにはメタ言語の使用、適切な段落分け等が必要であること、レベルが上がるにつれてマクロ構成(序論・本論・結論)への意識が高くなり、メタ言語も使用されるようになること、中国人日本語学習者が「因果(順接)」「並行(添加・対比・同列)」「転折(逆接)」や「まず」系列の接続表現を

多く用いること等が明らかにされている。接続表現に関しては、ある程度研究が進んでいるが、これらの研究は一度の調査であり、縦断的に調べたものではない。また、予備教育機関で学ぶ中国人学習者の書いた作文のマクロ構成やメタ言語に関する研究は、管見の限り見当たらない。大学入学前の日本語学習者の言語的特徴や構成・結束性に関する課題を探ることは、大学におけるアカデミック・ライティング教育にも有益な情報を与えることになると思う。

そこで、本研究では以下の課題について明らかにする。

- ①予備教育機関で学ぶ中国人日本語学習者が書く作文の言語的特徴は、予備教育を受ける前後でどのように変化するのか。
- ②9 か月間の予備教育を受けた中国人日本語学習者の作文のマクロ構成はどのようなものか。また、段落間に結束性をもたらすメタ言語はどの程度使用されているのか。
- ③中国人日本語学習者が用いる接続表現は、予備教育を受ける前後でどのように変化するのか。

以上を明らかにした上で、大学におけるアカデミック・ライティング教育に必要な視点について考察する。

3. 調査の概要

(1) 調査協力者

調査は、日本国内の日本語予備教育機関で学ぶ留学生 43 名(内訳: 中国人 39 名、ベトナム人 2 名、ミャンマー人 2 名)を対象に行った。2017 年 4 月に来日し、入学当初の日本語力は日本語能力試験 N5 程度であった。今回の分析は、1 回のみ調査を受けた人を除外し、対象の属性を均一にするため、その中から中国人留学生 33 名のみを対象とした。

(2) 調査の方法

入学直後の 2017 年 4 月 13 日(作文 1)と 2018 年 1 月 17 日(作文 2)の計 2 回、同じテーマで作文を書いてもらった。テーマは以下の通りで、日本語と中国語で提示した。時間は約 45 分で、辞書の使用は認めなかった。

テーマ:あなたは^{がいしょくほ}「外食派」? それとも^{じすいほ}「自炊派」?
^{がいしょく}「外食(外で食事をする事)」と^{じすい}「自炊(家で自分で食事を

作って食べること)、それぞれのプラス面(いい点)とマイナス面(悪い点)を挙げて比較し、「食生活」についてのあなたの意見を 600 字～800 字で書いてください。

アカデミック・ライティングには、説明、描写、ナラティブ、論証等の文章の種類が含まれるが、中でも比較(説明)して意見を述べる(論証)タイプの文章は日本留学試験の日本語記述問題でも出題されることが多く、大学入学後のレポート作成場面でも必要な技能である。よって、本研究では比較と論証の作文を扱うこととした。

前述した課題に基づき、まず、日本語文章難易度判定システム JReadability (<https://jreadability.net/>) を用いて作文 1、作文 2 の言語的特徴を調べた。次に、マクロ構成に関しては、作文 1 は十分な長さのものが少なく、途中で終わってしまっているものも多く見られたため、作文 2 のみ、マクロ構成(序論、本論、結論)ができていないか、どのような問題があるのかを分析した。さらに、段落間の結束性に影響を与えるメタ言語の使用についても調査した。マクロ構成、メタ言語については、具体的な作文例も示しながら課題を探る。また、文と文、段落と段落の結束性に関連するものとして、接続表現の出現状況について調べた。

(3) 予備教育機関における 9 か月間の授業内容

予備教育では、初級時は『みんなの日本語』を使用し、その後は日本語能力試験 N3、N2 の問題集を中心に授業が行われた。その中で、作文の授業は、自己紹介、単文レベルの文を作成させる段階の後、100 字ぐらいの作文から始め、400 字程度まで書かせていた。『みんなの日本語』学習時は、『みんなの日本語やさしい作文』を使用し、自分の国との比較をして意見を述べる作文(自由テーマ)も書かせている。その際、教科書の「作文メモ」をもとに書けば、序論、本論、結論の形になるように構成されている。後期は入試対策として自己 PR や、「学校・国でどんなことをしてきたか」などのテーマが中心であった。

作文の授業は、2～3 週間に 1 回程度で、9 か月で 10 回程度作文を書く授業があった。作文はすべて「です・ます」体で書かれた。接続表現に関しては、教科書で出てきた時にその都度教えており、特に接続表現の用法についてまとめて教えてはいない。

4. 結果

(1) 言語的特徴

表 1 に JReadability による作文 1、作文 2 の言語的特徴を示す。数値は 33 名の平均値で、*t* 検定を行った結果、すべての項目において 0.1% 水準で有意であった。

課題は 600～800 字とされていたが、作文 2 でも総文字数は 600 字に満たない。しかし、作文 1 と比較すると、総文字数は 3 倍近く長くなり、総文数も約 2 倍になっている。1 文当たりの平均語数も伸びていることから、長い文が書けるようになったと言える。レベル別語彙数を見ると、すべてのレベルで増加しているが、初級語彙が多い。中級前半語は数的には初級後半語の半数以下ではあるが、作文 2 の使用数は作文 1 の 4 倍近くになっていた。中級後半語、上級語も増えているが、特に上級語の使用数はまだ少ない。

表 1 2 回の作文の言語的特徴

	作文1	作文2
総文数	10.9	21.5
総文字数	204.9	563.4
平均語数	11.9	18.6
総形態素数	121.1	342.5
初級前半語数	18.7	57.4
初級後半語数	15.3	46.3
中級前半語数	5.5	19.8
中級後半語数	4.3	11.3
上級前半語数	2.9	5.2

(2) マクロ構成(序論・本論・結論)

33 名の作文 2 のマクロ構成を調べた。マクロ構成は序論、本論、結論から成るが、田中・久保田(2016)では「パラグラフは 1 文から成ることはない。」とされている。そこで、33 編を 1) 段落分けが適切になされていないもの、2) 段落分けはなされているがマクロ構成が不完全なもの(2-1: 序論がないもの、2-2: 結論がないもの、2-3: 序論・結論がないもの)、3) マクロ構成ができていないもの(3-1: 序論が 1 文のもの、3-2: 結論が 1 文のもの、3-3: 序論・結論が 1 文のもの、3-4: 序論・結論が 2 文以上のもの)に分けることにした。結果を表 2 に示す。なお、序論、本論、結論は段落が形成されているものを指すこととし、例えば、序論らしき文が本論の冒頭に入り込んでいるような場合は「序論なし」とする。

表-2を見ると、33名中序論、本論、結論のマクロ構成に大きな問題がなかったのは3)の16名で、約半数はマクロ構成に何らかの問題があった。以下、それぞれについて一部例も示しながら説明する。

表-2 マクロ構成 (序論・本論・結論)

1) 段落分けが適切になされていないもの		5
2) マクロ構成が不完全なもの	2-1: 序論なし	7
	2-2: 結論なし	2
	2-3: 序論・結論なし	3
3) マクロ構成ができていないもの	3-1: 序論が1文	4
	3-2: 結論が1文	2
	3-3: 序論・結論が1文	2
	3-4: 序論・結論が2文以上	8
計		33

1) 段落分けが適切になされていないもの

以下の作文例①は、段落らしきものは見られ、結論もあるが、特に後半は非常に細かく段落分けされている。内容を見ると、例えば、自炊についての話が第2段落、第6段落、第7段落に分けて記述されているが、これらは1つの段落で書いたほうがわかりやすい。このように、1つのまとまった事柄を1つの段落に書こうとする意識は認められず、適切に段落分けされているとは言えない。

<作文例① (協力者 A) >

わたしは昨年4月日本へ来ました。来てばかり外へ遊びすぎでした。ずっと外で食事しました、便利だし、おいしいし、サービスもいいです。

今、わたしは家で自分で料理を作ります。作るときは楽しいです。料理をつくって食べてとてもおいしいよ。

現在 毎日アルバイトしながら勉強します。時間が少ない、たくさん家で自分で食事します。ときどき外へ食事をします。例えば仕事をしたとてもつかれたこの時外で食事します。

私は日本の料理があまり好きじゃないです。どして好きじゃないです。さしみがきらいですぜんぜん食べない。すしも食べない。たくさんすしのなかになまものいれます。でもすきやきと焼きにくが大好きです。中国の同じの味。

料理の中一番好きは中華料理です。おいしいし、やすいし、からいです。

家でたくさんのはあいは中華料理を作ります。例えばトマトとたまごいため、ピマンとにくいためです。時間がある時、しゃぶしゃぶを作ります。

家で料理をつくる、からだに対して健康です、とてもはやいです。毎日充実します、とてもおもしろいです。

日本へ来て、私は成長します。親に希望にたえて独立します。今、だんだん独立になります。

健康のために家で自分で料理をつくるほうが良いと思う。

2) マクロ構成が不完全なもの

マクロ構成が不完全なものには、序論がないもの、結論がないもの、序論・結論の両方がないものがあった。序論がないものの中には、いきなり本論(比較)から始まるものと、1文程度の序論らしきものが本論の冒頭に入り込んでいるものの2つの型が認められた。作文例②は序論がなく、自炊のプラス面とマイナス面、つまり本論の内容から始まっている。そのため、作文のテーマや背景説明、筆者の立場がわからないまま読み手が読まされることになる。しかし、最終段落は、形は間違っているが「さいご」というメタ言語を使い、主張のわかりにくさはあるものの、一応まとめの段落を形成している。

<作文例② (協力者 B) >

序論なし

本論

毎日、私は自分で朝ごはんと晩ごはんをつくります。少こしお金をかかります、とても便利です。私は辛い料理が大好きです、それから自分で料理のあじを作るのはいいです。みなさんは好きなあじは同じじゃない。自炊派の悪いところは多い時間がかかります。毎日、仕事を終ります。それからスーパーで野菜と肉を買います。よる8時30分ぐらい、家へ帰ります。ご飯を食べます、それからお皿を洗います。とても忙しいです。

私は学校の食堂で昼ごはんを食べます。食堂のごはんのねだんはやすいです。私と友達毎日食堂で食べます。とてもはやくて便利です。以前、私は日本料理は好きじゃなかった、あじはちょっとうすい。いま、日本料理をなれます。時々、私と友達はレストランで食べます、やすみの日はひまです。レストランの料理はたかいです、あじはとてもおいしいです。多いい金をかかります、ここがいたい。外食派のいいところは野菜と肉をじゅんびしないもいいです。お皿を洗いません。これはいいです。

結論

さいご、私は「外食派と自炊派」の中、いいところもあります、自炊派は少こしお金をかかります。お金をは

らうはやさしいです、好きなあじは自分で作ります。外食派は多いお金がかかります。ときどきレストランで食べますもいいです。いつもレストランで食べますはダメです。

3) マクロ構成ができているもの

作文例③はマクロ構成ができているが、序論が 1 文の例である。序論が 1 文であり、背景説明等が欠落しているが、外食のほうがいいという自分の立場を述べ、第 2 段落で自炊のマイナス面を「これは一番わるい点です」「第二」「第三」といった言葉も使いながら説明し、第 3 段落で外食のプラス面を述べた後、結論部で再度外食派であることを述べており、全体の構成は整っている。また、各段落初めには「たとえば」「だから」「ここからみると」といったメタ言語が使用され、段落間の結束性も認められる。

<作文例③ (協力者 C) >

序論

私は外で食事は家で食事をつくるよりいいと思います。

本論

たとえばこうちで自分で食事を作って食べることは面倒です。うちをでて、スーパーへやさいをかいに行きます。そしてとてもべんりじゃありません。これは一番わるい点です。第二、しごとがあるとき、もしいそがしいですから、じかんがないですから、だからうちで自分で作って食べることは面倒です。第三、うちで自分でごはんをつくるのはやさしいです、でも毎日は何をつくるはうるさいです。

だから、外で食事のほうがいいです。外で食事は時間上はべんりです。いそがしいとき外でレストランをさがして、もうずく温ごはんをたべます。いろいろな美食をたべてもいいです。ともだちは私にきいて、“どこは美食があるですか”、私は全部も知ってる。ともだちに紹介して。外でごはんをたべるもいろいろな人を知っています。たくさんおもしろいことをきいて、いま、私はいつも外でごはんをたべるから、やさしく、きれいなおねえさんを知っています 私たちはいちばんいいともだちになりました。私たちはいつもいっしょに外でごはんをたべます。毎日はおもしろいことをはなします。家で自分でつくるこんばより外とでごはんをたべるのほうがいいです。

結論

ここからみると、私はうちで自分でつくるごはんは面倒です。外でともだちといっしょにごんばんをたべるのほうがいいです。だから私は外食派です。

作文例④と作文例⑤は、同じ協力者 (D) が作文 1 で書いたものと作文 2 で書いたものである。作文例④は、第 1 段落で外食のプラス面、マイナス面、自炊のプラス面を述べ、第 2 段落で自分の意見を述べているが、序論に当たる段落が認められず、マクロ構成に問題があった。また、段落冒頭の 1 字下げにも問題がある。

<作文例④ (協力者 D) >

私は自炊派。でも外食が好きです。私はすこし外を食べます。体が重いですから家で自分で食事を作って食べること。外食は健康じゃありませんしかし食べ物がおいしいです。自炊は外食よりがいいですね。私の意見は自炊が便利と健康です。自炊は食べ物を作りたいです。いつでも好きな健康の食料品です。外食を食べます。体がおもいができます。でも自分で野菜やスープや料理を作って、楽しい、とてもうれしい。

外食の食料品と自分で食べ物を造ってとどちらおいしいですか？実は自分で食べ物を作って、とてもおいしい。時々体によくないとき自分で食事を食べます。体にいいなります。ダイエットのとき、自分で野菜を作って、体が軽くなります。そして人の顔にあかがあります。3 月 22 日日本へ来ましたから外の食べ物かたかい。お金がない自分で食事を作って食べるが安いです。

しかし、作文例⑤ではマクロ構成ができており、序論も 1 文ではなく 2 文で構成されている。序論では「若い人は外食派が多いと思う」という一般論を述べてから、しかし自分は自炊派であるという立場を表明している。続く第 2 段落では外食のプラス面とマイナス面、自炊のプラス面を説明し、第 3 段落で自らの意見を述べ、結論で自炊派という立場を再度示して終えている。協力者 D は 9 か月間で構成意識を身につけたと言えるだろう。

<作文例⑤ (協力者 D) >

序論

いつも若い人は外食派向きが多いと思います。でもわたしは自炊派が好きです。

本論

まず外食派と自炊派の方面と言います。外食派は便利で、手間を省くのに、たくさん金を支払して、料理の味はときどき自分の味に合わないと思います。しかし、自

炊は自分で材料を選んで、好きな味を作りますよ。時間があるとき新しい料理を研究して、食べたあとで気持ちよくなりました。自炊の方面はお金を省いてから、ほかの方面を使えます。自分で料理を作って、栄養を満足すると思います。

「食生活」についてのわたしはたくさん意見があります。料理の見外によって、人々の食欲が増えます。食生活中で料理の作り方や見外など大切だと思います。いい料理は人々に各方面いいかもしれません。食べるとき栄養の補足は体に必要があります。人々の体はいろいろな栄養がいります。ちがう食べ物の中でちがう栄養があります。それぞれ食べ物の中で好きなものもあって、嫌いな食べ物があります。でも栄養は大切ですから、栄養の平衡のために、嫌い食べ物も食べなければならないと思います。ときどき仕事や生活が忙しくて、必ず自分で好きな料理を作って、楽になります。いい食生活を取りがたいと思います。

結論

とりあえず、自炊派はもっといいです。私の生活はルールがあります。自炊は手間がかかりながら私は自炊が好きです。

しかし、この例では、本論で「まず」が使用されているにもかかわらず、それに続く「次に」等が見られない。そのため、「次に」が来ることを期待している読み手に混乱を与えることになる。このように、「まず」のみを使用し、対等性に問題のある例が多く見られた。

(3) メタ言語

作文例②の「さいご」、作文例③の「ここからみると」のように、作文 2 では段落間に結束性をもたらすメタ言語の使用も見られた。表-3 は段落冒頭で使用されたメタ言語をまとめたものである。33 名中、段落間で 1 回以上メタ言語を使用していたのは 20 名、うち 2 回以上使用していたのは 9 名であった。以下、*は誤用を表す。

表-3 段落間に使用されたメタ言語

■接続表現

- まず (4)
- でも (3)、しかし
- だから (2)、ですから
- 実は (2)

それで

- *そこで
- *あとは
- *一面で

■予告のメタ言語

- *比較して
- *私の観点は

「食生活」についての私の意見は
外で食事をする 것과家で自分で食事を作って食べることのプラス面とマイナス面は

- *ほかのマイナス面

■まとめのメタ言語

以上は (2)

- *さいご

ここからみると
これは私の意見です。
これは私の考えです。
これは私の食生活です。

以上は自炊派のいい点と悪い点です。

以上はどのようにしてわたしは「自炊派」と「食生活」の理由と意見です。

表-3 を見ると、誤用は散見されるものの、順接、逆接や列挙の「まず」といった語・句レベルの接続表現、続く部分で「いい点」「悪い点」について述べることを示す「予告のメタ言語」、「これは私の意見です」「以上は・・・です」といった「まとめのメタ言語」が用いられていることがわかる。作文例⑥はメタ言語使用の例である。

<作文例⑥ (協力者 E) >

わたしは「自炊派」です。自炊派は外食派よりいいところが多いと思います。

自炊派はいいところはとても便利です。自分で何を食べたい。何を作ります。辛いし、甘いし、しおからいし、何でもいい。あと、自炊派なら肉が多い使います。これは外食派はできないです。

でも自炊派の不便もあります。例えば時間をかけます。午前学校へ行きます。午後仕事があります。この間は暇な時間がすくないです。だからちょっと忙かしいです。

自炊派が一番いいところはお金はあまりかかりません。以上は自炊派のいい点と悪い点です。

外食派のいい点と悪点もたくさんです。

外食派いい点も便利です。何もやりません。レストランへ行って注文します。あと食べます。でも長時間レストランへ行ったら、いっぱいお金をかかります。それなら貯金することができません。

外食派の悪い点はいっぱいあります。

例えば食材の新鮮 体にどうですか。いろいろな問題。もしこの店の客さん多ければ、順番を守ります。それなら時間はいっぱいかかります。あまりよくないです。

私は「食生活」に意見は大切です。

まず必ず体によい、食材は新鮮が必要です。食事を作る時間はすくないほうがいいと思います。

ごはんを食べるのは人の一日の中一番大切なことですから。私はとても重視です。

以上はとうしてわたしは「自炊派」と「食生活」の理由と意見です。

作文例⑥は、非常に細かく段落分けされている点では問題があるが、メタ言語を多く使用して展開はわかりやすくなっている。まず、冒頭で「自炊派」という自分の立場を示してから、自炊のプラス面、マイナス面を述べ、自炊から外食に話が転換する部分で「以上は自炊派のいい点と悪い点です。」というメタ言語を使用している。さらに、メタ言語とは言えないが、それに近い働きの文として「外食派の悪い点はいっぱいあります。」と述べてから「例えば」として外食のマイナス面に進み、最後に自分の意見をまとめて、「以上は・・・理由と意見です」とまとめのメタ言語で締めくくっている。しかし、この例でも「まず」のみが使用され、「次に」等が続いていないという問題は見られる。

このように、9 か月の予備教育を受けた学習者の作文においても、メタ言語を駆使したものがある一方で、多くの作文は段落間でメタ言語が使用されておらず、結束性に問題があった。

(3) 接続表現の使用状況

表-4 は作文の中で使用された接続表現の使用状況を用法別、正用・誤用別に示したものである。分類は GoodWriting Rater (<https://goodwriting.jp/rater>) の「メタ言語」を参考にし、() 内の数字は使用数を表す。ここでは、結束性を調査するため、文頭に表れたもののみを対象とし、「A、B、そして、C」のように文中で言葉を

表-4 接続表現の使用状況

順列			
作文1		作文2	
正用(3)	誤用(2)	正用(14)	誤用(7)
だから(2) ですから	つきまして したがて	だから(8) ですから(3) それで(3)	そこで(4) それなら(2) それで
逆接			
作文1		作文2	
正用(26)	誤用(0)	正用(47)	誤用(4)
でも(23) しかし(3)		でも(33) しかし(12) だけど(2)	でも しかし それでも それよりも
並列			
作文1		作文2	
正用(9)	誤用(11)	正用(14)	誤用(13)
そして(6) それから(3)	そして(8) それから(2) それに	そして(9) それから(2) それに(2) そのとき	そして(4) それから(4) あと(2) そしては あととは それと
対比			
作文1		作文2	
正用(0)	誤用(2)	正用(0)	誤用(1)
	反して あるいは		一面で
列挙			
作文1		作文2	
正用(1)	誤用(0)	正用(10)	誤用(4)
まずは		まず(6) まずは(3) さらに	さいご 次ぎは 第二 第三
換言			
作文1		作文2	
正用(0)	誤用(0)	正用(0)	誤用(1)
			つもり
例示			
作文1		作文2	
正用(7)	誤用(2)	正用(13)	誤用(0)
例えば(4) 実は(2)	たとえば 例に 例	例えば(10) 実は(3)	
補足			
作文1		作文2	
正用(0)	誤用(0)	正用(2)	誤用(0)
		なぜなら ただ	
転換			
作文1		作文2	
正用(0)	誤用(0)	正用(0)	誤用(1)
			じゃ
結論			
作文1		作文2	
正用(0)	誤用(0)	正用(2)	誤用(0)
		以上は(2)	
総計			
作文1		作文2	
正用(45)	誤用(18)	正用(103)	誤用(30)

つなぐために使用されるようなものは分析対象外とする。

まず、作文 1 と作文 2 の全体的な傾向を見ると、作文 1 の段階では「逆接」「並列」の使用が多く、「例示」「順列」が続く。作文 2 になると、それらに加え、作文 1 ではほぼ見られなかった「列挙」の使用が増えている。アカデミック・ライティングで使われる書きことばの接続表現の使用に関しては、作文 2 を見ても、「しかし」「まず」「なぜなら」「以上は」等は使われているものの、「また」「そのため」「したがって」等は使用されず、「だから」「それで」「でも」「そして」「それから」「それに」等で代用されている。

使用語彙では、作文 1 で「でも」が多用されているが、すべて正用で誤用はなかった。一方、「そして」「それから」も多く使われているが、半数ほどは誤用であった。その他、「例えば」「しかし」「だから」「実は」等が使用されている。作文 2 でも、「でも」の使用数が多いこと、「そして」「それから」の誤用が多いことは共通している。一方、「列挙」の「まず」、話の転換部にも使用されやすい「しかし」の使用が増え、結論部に使われる「以上は」も一部使われていることから、全体構成への意識が出てきていると推察される。

次に、用法別に見てみると、「順接」は「だから」「ですから」「それで」がほぼ正しく使われている一方で、「そこで」「それなら」等の誤用も見られる。例 a は「だから」の正用例、例 b は「そこで」の誤用例である。例 b では、「それで」を使用すべきところに「そこで」を使っている⁴⁾。

- a. 時間がありません。だから、私はそとで食事をしてと思います (作文 1)
- b. 朝、眠むたいで、起きません。そこで、朝ご飯を作りませんから、時間がありません (作文 2)

「逆接」は、上述した通り、「でも」を中心に使用され、作文 2 では「しかし」が増え、「だけど」も使われていて誤用は少ない。「例示」も「例えば」「実は」がほぼ正しく使われている。

「並列」は、作文 1、作文 2 ともに「そして」「それから」が多く使われているが、「それに」も加え、初級で学習するものが目立つ。しかし、誤用の割合が非常に高い。

以下の例 c では、「したがって」を「そして」で代用し、例 d では「それから」を「だから」と混乱して使っており、「そして」「それから」を本来の用法より広い意味で捉えて使用している。

- c. 自分で料理が大好きです、そして、私は自炊派はもっといい選択です。(作文 2)
- d. わたしはお金もちじゃないです。それから私はじすいはです。(作文 2)

今回の課題は「外食」と「自炊」を比較するものであったが、「一方」「それに対して」といった「対比」の接続表現は使用されず、「反して」「あるいは」「一面で」といった誤用が見られたのみであった。

「列挙」に関しては、作文 1 では「まずは」が 1 例あったのみだったのが、作文 2 では「まず」「まずは」の使用が大きく増えている。ただし、「まず」「まずは」が 9 例あるにもかかわらず、それに続くものは誤用の「次ぎは」1 例しか見られない。この点については (2) の作文例⑤⑥でも示した通りである。

「補足」は、作文 2 で「なぜなら」「ただ」が各 1 例使用されている。例 d は「なぜなら」に呼応する文末の「からだ」が欠落しているが、前文で自炊に賛成だが外食をしていると述べた後、その理由を述べる文の冒頭で使用しており、意味は正しく理解している。例 e は前文で自炊のいい点を述べた後、「掃除が必要だ」と部分的に否定する内容を「ただ」で接続して正しく使っている。

- d. 僕は、「自炊派」が賛同して、「外食派」にしています。なぜなら、僕は彼女がいない！ (作文 2)
- e. だから、現在私は家で自分食事を作って食べる、自炊です。料理作るのときはこの過程を楽しみます。ただ、家で自分で食事を作って食べるのとき、ちょっと感じたほうが悪い、それは掃除が必要だ。(作文 2)

「結論」は、「以上は」が作文 2 で 2 例あるが、どちらも作文の最後の文で「以上は・・・(理由と) 意見です。」の形であった。

「換言」「転換」は誤用が各 1 例あったのみで、正用は見られなかった。

総計を見ると、作文 1 が正用 45、誤用 18 で計 63 例、

作文 2 が正用 103、誤用 30 で計 133 例となっており、作文 2 で大きく増えているように見える。JReadability による接続詞の平均使用数でも、作文 1 が 0.70、作文 2 が 1.30 で、*t* 検定では有意傾向が見られた ($p < .10$)。しかし、接続表現数 (作文 1 : 63、作文 2 : 133) を 33 名全員の総文数 (作文 1 : 358 文、作文 2 : 710 文) で割って使用率を出すと、作文 1 が 17.6%、作文 2 が 18.7% で、これは範 (2011) で示されている日本語母語話者の接続表現の使用率 24.8% と比べると低い数値となっている。

5. 考察

以上の結果から、2 の (2) で述べた課題について考察する。課題①の言語的特徴については、N5 レベルで入学し、9 か月間予備教育で学んだ協力者の作文は、入学当初と比較すると、1 文当たりの長さが長くなり、作文全体を見ても 3 倍近く長くなっていた。横断研究ではあるが、波多野 (2018) では、課題達成群と不達成群の記述量の差は「文の長さ」でなく「文の数」の差であるとしているのに対し、田中他 (2017) では上位群のほうがエッセイ全体が長く、1 文も長くなるとしている。本研究は縦断研究だが、結果は田中他 (2017) を支持するものとなった。使用語彙に関しては、初級語彙が中心で、中級語彙も使用されるようになるが、中級後半から上級語彙の使用はまだ限られているということがわかった。これは、接続表現でも逆接の「でも」、並列の「そして」「それから」、例示の「例えば」、順接の「だから」を始め、初級で学ぶ表現が中心で、「対比」「換言」「補足」等は使用がほとんどないこと、書き言葉的接続表現の限られた使用からもわかる。作文 2 では長いものが書けるようになるが、語彙的には平易なものを中心のようである。

アカデミック・ライティングにおいては、マクロ構成が非常に重要だが、課題②のマクロ構成については、今回の 33 名のうち、序論や結論がないなど、約半数の作文で問題があったことから、まず序論、本論、結論という全体構成で書くことへの意識付けが必要であろう。また、全体の量のバランスも重要である。田中・阿部 (2014) の巻末資料によると、序論、本論、結論の割合は、1 : 3 ~ 5 : 1 が適切だとされているが、マクロ構成ができていない場合でも、その半数以上が序論または結論が 1 文であ

った。指導時には、序論は課題によって背景説明や全体の予告、課題に対する自らの立場等を書き、結論もただ意見を 1 文で述べるだけでなく、全体をまとめ、自分の主張を繰り返すなどして、それぞれ全体の 15~20% の量にすることが適切であることを理解させることが必要であろう。メタ言語については、一部で使用が認められたが、段落間での使用を見ると、2 箇所以上でメタ言語を使用した協力者は 9 名のみであった。結束性はメタ言語だけがもたらすものではないが、知識として教えやすいものであり、作文教育において、段落間のどの部分でどのようなメタ言語(予告のメタ言語、まとめのメタ言語、段落間の関係を示すメタ言語等)を使用するのが効果的かを、例とともに明示的に示す必要があるだろう⁵⁾。

課題③の接続表現については、本研究では接続表現の使用率が範 (2011) で示された日本語母語話者の結果と比べて低く、異なる結果となった。「逆接」「並列」「例示」「順列」の使用が多かった点については、範 (2011) が「因果 (順接)」「並行 (添加・対比・同列)」「転折 (逆接)」を多く使用しているとしているのと類似の結果となった⁶⁾。ただし、範 (2011) はそれを中国語による干渉としているが、本研究で使用された接続表現を見ると、初級の段階で学習する接続表現の出現頻度が高いと言え、中国語による干渉であるかは明確ではない。「逆接」「例示」は誤用もほとんどなく、早い段階で習得しやすいものと思われる。「そして」「それから」は、黄 (2012) が説明文において連続して使用されるという問題点を指摘しているが、本研究では「そして」「それから」の誤用が作文 2 でも目立った。これは倉持・鈴木 (2007) の結果とも一致する。「そして」「それから」は前後の文の関係性を考えずに、あるいはそれに代わる表現を知らないために、知っている言葉でつないでしまうために起こる誤用だと思われる。「それから」は「だから」と混同して使用される場合も見られた。「逆接」「例示」ほど前後の意味関係が明白でなく、使用範囲も比較的広い「そして」「それから」は、このレベルの学習者には使い分けが難しいものなのであろう。

また、作文例⑤⑥のように「まず」は使っていても、それが一般的には「次に」「最後に」のような言葉とともに用いられることを理解していないことがわかった。したがって、これら「列挙」の接続表現を作文例で示し、

全体の構成の中での使用を意識付けする必要があるだろう。

さらに、大学のアカデミック・ライティングで必要とされる書き言葉的な接続表現は作文 2 の時点でもほとんど使われていないことから、「また」「そのため」「したがって」のような接続表現を教えるとともに、前後の関係性によって「対比」「換言」「補足」等の表現も使用できるようにする必要があるだろう。本研究の協力者は接続表現全体の使用率が、日本語母語話者の使用率(範 2011)と比べて低いことから、文と文、段落と段落のつながりがスムーズでないと考えられる。範(2011)では、接続表現の使用率が、中国人日本語学習者による中国語作文、中国人日本語学習者による日本語作文、日本語母語話者による日本語作文の順で高いとされていた。本研究の協力者の使用率は範(2011)で示された日本語母語話者による日本語作文の使用率より低かったことから、本研究の協力者は、日本語では母語(中国語)で作文を書く場合より接続表現の使用がかなり少なく、文の羅列になっている場合が多いということが考えられる。日本語における文と文のつながりを示す接続表現の役割を改めて確認する必要があるだろう。

6. まとめと今後の課題

本研究では、9 か月間の予備教育を終えた中国人日本語学習者の作文の言語的特徴と構成・結束性について調査した。そこからは、量的には長い文が書けるようになってはいるものの、まだ全体の構成や結束性には問題があることがわかった。大学におけるアカデミック・ライティング教育では、予備教育段階の学習で不足している部分を理解し、重点的に扱う必要がある。特に、この段階でほぼ使用の見られなかった「対比」「換言」「補足」等の接続表現やメタ言語については、作文全体の例を示しながら、段落間、文と文の間どの部分で使用可能かを理解させ、使用を促す必要があるだろう。また、マクロ構成が整っていたとしても、序論、結論の書き方には問題が見られた。序論、本論、結論の分量も重要であることを理解させ、序論、結論で書く内容についても5で述べたような意識づけをさせるべきであろう。

今回は、日本語学習期間が短い学習者を対象としたが、今後はより上級レベルの学習者も含めた調査をし、構成や結束性がどのように変化するのかを調査したい。

【補注】

- 1) JF スタンダードとは、相互理解を理念として国際交流基金(JF)が開発した、日本語教育のコースデザイン、授業設計、評価を考えるための枠組みで、A1、A2、B1、B2、C1、C2の6レベルに分かれている。この6レベルはCEFR(Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessment)と共通する。B1レベルの「書く」ことに関する記述は、「身近で個人的にも関心のある話題について、単純な方法で結びつけられた、脈絡のあるテキストを作ることができる。経験、出来事、夢、希望、野心を説明し、意見や計画の理由、説明を短く述べるができる」となっている。
- 2) 田中・阿部(2014)によると、「パラグラフ」は日本語の「段落」のようなものだが、1つの「段落」の中では複数のトピックが取り上げられてもいいが、1つの「パラグラフ」の中では1つのトピックだけ取り上げるという。以下、本稿では、引用部分以外は「段落」という言葉で統一する。
- 3) 範(2011)でも本研究と同様に、「まず」「最後に」のような副詞が接続詞的に機能するものも「接続表現」に含めるとしている。
- 4) 例bの「そこで」に続く文は、「時間がいないから朝ご飯をやりません」の誤用だと考えられる。
- 5) 田中・阿部(2014) p.93-94に「ファーストフードとスローフード」というテーマの作文例が示されている。また、Good Writing-JPのサイトには、「個人旅行」と「バック旅行」の作文例がレベル別に掲載されている。
- 6) 「並行」については、先行研究で記した通り、範(2011)では、「添加」「対比」「同列」が含まれるため、厳密には比較することができない。

【引用・参考文献】

- 倉持益子・鈴木秀明(2007)「日本語学習者における接続詞の習得—留学生の接続詞使用状況」『神田外語大学紀要』19、pp.211-234
- 黄明侠(2012)「中国人日本語学習者の作文に見られる序列の接続表現使用の問題点：日本語母語話者の評価から」『留学生教育』17、pp.61-71
- 国際交流基金「JF日本語教育スタンダード」<https://jfstandard.jp/top/ja/render.do> (2018年11月25日参照)
- 田中真理・阿部新(2014)『Good Writingへのパスポート—読み手と構成を意識した日本語ライティング』くろしお出版
- 田中真理・阿部新・影山陽子・佐々木藍子・坪根由香里(2017)「ヨーロッパ日本語学習者のライティング(エッセイ)

分析：総合的評価とマルチプルトレイト評価結果を参照して」『ヨーロッパ日本語教育』22、pp.75-92

田中真理・久保田佐由利 (2016) 「日本語アカデミック・ライティングに規範は必要ないか：「構成」面の分析に基づく提案」『2016 CAJLE Annual Conference Proceedings』

田中真理・坪根由香里 (2011) 「第二言語としての日本語小論文における good writing 評価—そのプロセスと決定要因—」『社会言語科学』14(1)、pp.210-222.

坪根由香里・田中真理 (2015) 「第二言語としての日本語小論文評価における『いい内容』『いい構成』を探る—評価観の共通点・相違点から—」『社会言語科学』18(1)、pp.111-127

西山令子 (2016) 「ベトナム人初級日本語学習者への作文指導—学習者の書いた作文の問題点をもとに—」『環太平洋大学研究紀要』10、pp.141-149

波多野博頭 (2018) 「JF 日本語教育スタンダード B1 レベルの言語特徴についての検討：学習者による作文に基づいた分析」『Learner Corpus Studies in Asia and the World』3、pp.189-206

範海翔 (2011) 「中国語母語話者の中国語作文における『連詞』の使用特徴とその特徴が日本語作文に与える中国語干渉について」『現代社会文化研究』51、pp.1-13

Good Writing-JP 「読み手と構成を意識した日本語ライティング」
<https://goodwriting.jp/wp/>